

視察先別報告 ザンビア

【青年海外協力隊】

チランガ農業事務所視察

概要

2009年までJICAが実施してきた村落開発を目的とした生活向上プロジェクトのフォローアップとして、3名の青年海外協力隊が派遣された。それぞれの隊員は30程度の村を中心に巡回し、生活向上を実施するための組織作りから運営管理までのサポートを行い、隊員が去った現在でも多くの村でその時に開始した生活向上活動が継続されている。

1

伊澤 咲弥

長い間、園芸や農業を中心に暮らしてきたこの村で、収入向上のため養殖池を作る提案をした協力隊員。最初はコミュニティに一つ作った養殖池だったが、今では個人で池を作り養殖して収入を得るようになった人もいる。「養殖技術や知識だけでなく、自分たちの生活は自分たちで変えられるということを学んだ。」という村の人の言葉や、今もその取り組みが継続され、暮らしを豊かにする手段になっているという事実が、理想的な国際協力の仕方だということを感じた。協力隊員の情熱が、この村の人々の考え方を、行動を変え、暮らしを変えている。後世に受け継がれる素敵な活動だったのだと思った。

2

伊藤 葉子

ここでは、かつて青年海外協力隊の方が三代にわたって、農業の状況を改善するために活動していたという。現地一般的な暮らしぶりを見て、現地の方と交流ができた初めての視察先だった。村の方々は私達を心から歓迎してくれ、歌や踊りを披露してくれた。感動と同時にこの村での青年海外協力隊の方々の存在の大きさを実感した。村は、ルサカを中心部から一時間ほど離れたところにあり、とてもどかで、これが本来のザンビアの姿だと感じた。ルサカを中心部は、各国の支援によって、都市化が進んでいた。しかし、その変化がとても急激なことをこの村の訪問を通して学んだ。各国の支援が、彼ら自身で行うべき部分にまで及んでいるかもしれないと、ふと考えた。

3

今田 澄子

はだしの子らがはちきれんばかりの笑顔で迎えてくれた。ドライシーズンには想像しにくい、雨季の緑は本当に美しいという。かつて一人の協力隊員がこの地に改革をもたらした。専門家でない彼が孤独に耐え、試行錯誤を重ね、汗をかき、村人に失敗を検討して改良する習慣を伝えたという。「Mr.オノにマインドセットを学んだ」現地の女性が力強く語る。養殖池の成功は、経済だけでなく何より人の心に、自分達も人生をより良く変えることができるという思いを生んだ。オノは既にここにはいない。村人は自立した。一隊員の熱意が花咲き実を結んだ幸福な事例である。願わくは魚の養殖だけでなく、様々の分野にオノの果実が実るよう。



4

江口 辰之

協力隊員として活動をしていた小野さんの情熱を感じた場所だった。43年前（1972年）に18家族が移住してきて出来た村を訪問した。小野さんの取組としては、養殖池での魚の養殖を提案したことである。コミュニティで運営している養殖池を見たが、視察時は乾期で水はなかった。8×12mの養殖池から始め、稚魚から8か月間魚を育て、売ってみたところ大儲けしたので今後も大きくしていきたいという。今年は生簀で600匹の成魚を6月に出荷した。禁漁期間中に出荷できるので、効率が非常に良いと現地の方たちがおっしゃっていた。現地で先頭に立って養殖池を推進した女性の方は、JICA及び日本のボランティアは魚を養殖して市場で売るとい、アイデアと自活する力を与えてくれたと感謝をしていた。

5

黒川 叔乃

「Onoは、自分たちの生活を自分たちの力で変えていくためのアイデアと情熱を与えてくれた。だから私たちは、もう昔の生活には戻らない。」農村を視察中に、村人からこの言葉を何度も聞いた。小野隊員がこの地を離れて数年が経過しているが、どれほどの影響力を及ぼしていたのかが伝わってきた。大半が農業に従事していた村に“養殖池を作り、魚を育て売り、生計を立てる”という新たな収入を得る仕組みを提案した時は、賛同者が誰もおらず、毎日一人で養殖池を作るために土を掘る日々だったという。そのひた向きな姿勢に村人たちの心が動かされ、今では村全体に養殖池が広がっている。相手に信頼され一緒に汗を流していくという姿勢の重要性を改めて知ることができた。

Republic of Zambia

- 6 河本 梨絵 農作物の栽培が主な生業だった農村。カフエ川の支流近くという地理的利点を利用した淡水魚の養殖をJOCVが提案し、その実践と定着に尽力した功績を実感。水源からポンプで水をくみ上げ、交替で畑や養殖池に水を引く。魚の養殖は雨季に行うため、乾季の訪問時、池に水はなかった。JOCVが初めて導入を提案した時は、村人の反対もあったという。隊員は説得を続け自ら池を掘ることで、村人の信頼を得て多くの養殖池がつくられ、村に現金収入をもたらした。ドラマのような展開だと思った。村に日本人がいなくなった今も養殖のノウハウは村で生きている。教えられたことだけではなく、更に生活の質を向上できるかは村の人たち次第だ。彼ら自身で改善策を考え、実践していく姿をいつか見ることができれば、それは素敵なことだと思う。
- 7 高場 希恵 ニュートリション村で受けた大歓迎は、過去にこの村で活動された3名の隊員たちの貢献の表れである。2代目の小野隊員が提案した養殖池は現在も続き、貴重な現金収入の手段となっているようである。さらに魚の養殖、隊員の姿を通して学んだ「自分たちの生活を自分たちで向上させる」という精神が未だに、村の人々の中に生きていることが印象的であった。一人でこの養殖池を作り始めた小野隊員も素晴らしいが、見ず知らずの日本人の提案に疑心暗鬼ながらも協力する優しさ、継続して行う力、チームワークを持つ村人あってこそその成功であると思う。支援というのは一方的ではなく、双方が協力し合うときにはじめてそこに変化を起こすことができるものだと感じた。
- 8 中里 祥子 かつて村人は農業を主としていたが、思うように収入が得られなかった。以前赴任していたJOCV（青年海外協力隊）が提案した魚の養殖が村人の現金収入につながり村へ広がりを見せていた。日本人の活躍に対して歌や踊りで感謝を示す女性たちがいて、同じ日本人として嬉しくなった。現金収入が増えた一方で、皆が収入の良い養殖業にシフトした場合、以前の状況と同じようになってしまわないのかという心配が残った。村人が一斉に同じものを栽培するのではなく、収穫時期をずらす、品種を変えるなどの工夫が農業でも養殖業でも共通するのではないだろうか。村人の今後を見守りたい気持ちになった。
- 9 花村 さくら ニュートリション村はいくつかの世帯が移住したことによってできた新しい村で、農業をして生活していた。青年海外協力隊が派遣され、灌漑を導入し、魚の養殖を始めた。すると現金収入がができ、動物性たんぱく質を摂れるようになり、生活が豊かになった。農村の人々は協力隊であった小野さんに非常に感謝しており、歌って踊って感謝の気持ちを表現してくれた。小野さんの例は、50年の長い協力隊の歴史の中でも特に成功例なのではないだろうか。
- 10 峰元 義人 案内してくれたアンナ・ナワさんや集落の方々、協力隊員が残したティラピアの養殖池のことを、私たちに話すのが嬉しくてたまらないという笑顔で話してくれた。小規模農家の収入向上を図ることを目的に活動していた協力隊員が、地理的な好条件に目を付け養殖池の提案を行った。結果として、ザンビアの公務員の平均月収約1万円に対し6~7万円の収入を得た。入植当時は18家族だった集落も現在は46家族530人までになり、個人で養殖池を持つ者もいるという。「彼は18キロの道のりを毎日歩いて来て、つるはしとシャベルを使い1人でやっていた。」真偽のほどは別としても、当時の隊員の苦勞を尊敬の念を込めて語ってくれた。
- 11 蓑田 竜史 「伝説の日本人」まさにそんな言葉がぴったりだ。村は移住者達で作られた活気と暖かさ溢れるコミュニティ。現在協力隊員はいない。「伝説隊員」（小野さん）の話を聞いた。1人の力は偉大であり、世界を変えらるゝとはこういうことをいう。感動した。最初は相手にされず、1人で地面をとにかくクワンバ・クワンバ（掘って掘って）、一ヶ月クワンバしまくって（村のお母さんが何度も現地語で繰り返すので覚えてしまった！）養殖用ため池を作ったと、一番に彼を手伝ったお母さんが涙をうかべながら一生懸命の演説。18人による養殖が成功。村は自立。現在40人が養殖に携わる。「村の偉人」伝説が我々に語られている最中、他のお母さんたちが嬉しさのあまり即興の歌を歌い出す。しまいには皆で踊り出す。♪昔の怠惰な生活には戻らない~よりよくしていくぞ~♪村民の幸せを願った1人の活動。住民を動かし、今定着しつつある。これが真の協力/援助か！クワンバ！感動は最高潮！この視察で最も印象深いシーン！